

〔資料・批評〕

2011年アート・クリティック活動の報告

演劇研究グループ

編集：安藤隆之、酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

昨年の『文化科学研究』Vol.22 (2010) 掲載の「2010年アート・クリティック活動の報告」に続いて、第2弾「2011年アート・クリティック活動の報告」をお届けする。

今年度もほぼ毎月1回、水曜日の午後、文化科学研究所で、「演劇研究グループ」の所員、準所員を中心に、学内外の演劇、音楽、オペラ愛好家が集まり、お互いの鑑賞体験を報告しあい、演劇談義を続けた。主に東海地方を中心に、関西、関東にまで足を伸ばし、夏にはイギリスにまで出かけ、80（イギリスを含めると91）もの公演を鑑賞してきた。鑑賞してきた公演はオペラ、ミュージカル、いわゆるストレート・プレイ、歌舞伎、能と多岐にわたる。現在のところ、一番の関心はこの地方におけるオペラとミュージカルの研究であるが、そこに至る途中経過としての我々のこの1年の活動を報告したい。何人かの所員、準所員が同一の公演を観てきて、批評し合うとかなり議論が深まることが体験的に分かっているので、これからも、できるだけこの方法を採用して研究を深めていかなければならないと思っている。

本稿では、今年度の「アート・クリティック」で取り上げた観劇演目（実際の観劇は2011年1月から12月まで）をまずリストアップし、研究例会で論じた、「2011年オペラ上演の動向」「2011年ミュージカル上演の動向」の2論考と、「アート・クリティック」で取り上げた公演のうち、主だったものについての鑑賞記とを掲載した。

昨年の「活動の報告」の「はじめに」に、「今後3年間に、この活動を本格的に推し進めて批評という形にしてみようと思う」と書いた。次年度もこの活動を継続しながら、研究の成果を纏めたいと願っている。

（酒井正志 記）

I. アート・クリティック2011年に報告された観劇演目リスト

2011年1月から12月に観劇され、2010年1月例会から、2011年の12月公演を含む2012年1月例会で報告された観劇演目リストに通し番号をつけた。

- ①ミュージカル『ロミオとジュリエット』（小池修一郎 潤色・演出） 1月3日(月) 宝塚大劇場
公演：宝塚歌劇団雪組 作：プレスギユルヴィック 主演：音月桂、舞羽美海 制作：宝塚歌劇団
(服部)
- ②演劇『出番を待ちながら』（末木利文 演出） 1月10日(月) 四日市市文化会館
作：ノエル・カワード 訳：高橋知伽江 主演：三田和代 制作：木山事務所
(服部)
- ③演劇『ドン・ファン』（オマール・ポラス 演出） 1月23日(日) 14：00～ 静岡芸術劇場
原作：ティルソ・デ・モリーナ、モリエールほか 翻訳：芳野まい 主演：三島景太 制作：
SPAC
(服部)
- ④音楽劇『プライド』（寺崎秀臣 演出） 2010年12月23日(木) 16：00～ 名鉄ホール
原作：一条ゆかり 音楽：佐藤俊彦 主演：笹本玲奈、新妻聖子 制作：東宝
(玉崎)
- ⑤演劇『わが町』（宮田慶子 演出） 1月22日(土) 新国立劇場・中劇場
作：ワイルダー 音楽&ピアノ：稲本響 主演：小堺一機、相島一之 制作：新国立劇場 (酒井)
- ⑥宝塚名古屋公演・ミュージカル『愛するには短すぎる』&ロマンチック・レビュー『ル・ポアゾン
愛の媚薬II』（正塚晴彦 演出） 2月12日(土) 12：00～15：30 中日劇場
原案：小林公平 制作：宝塚歌劇団
(磯貝)
- ⑦演劇『大人はかく戦えり』（マギー 演出） 2月5日(土) 昼公演 名鉄ホール
作：ヤスマナ・レザ 翻訳：徐賀世子 主演：大竹しのぶ、段田安則 制作：シス・カンパニー
(服部)
- ⑧名古屋観世会定例公演『嵐山』&『熊野』 2月13日(日) 名古屋能楽堂
主演：武田邦弘、観世清和
(磯野)
- ⑨『For You Concert』（池山奈都子 構成・演出） 1月28日(金) 18：30～ 名古屋市芸術創造セン

- ター 音楽監督・指揮：牧村邦彦 振付：徳山博士 主演：井原義則、錦木勇樹、小玉弘美 制作：名古屋市文化振興事業団
第1部は事業団のオペレッタ・ガラ、第2部はコンサート形式『レ・ミゼラブル』 (玉崎)
- ⑩演劇『苦悩』(パトリス・シェロー 演出) 2月19日(土) 16:00~17:30 京都芸術劇場(京都造形芸術大学ホール) 作：マルグリット・デュラス 主演：ドミニク・ブラン (服部)
- ⑪歌舞伎『芦屋道満大内鑑・葛の葉』、『勸進帳』、『与話情浮名横櫛・源氏店』 2月20日(日) 11:00~ 御園座 主演：福助、團十郎、梅玉 制作：松竹 (磯貝)
- ⑫歌劇・セミステージ形式『イリス』(井上道義 指揮・演出) 2月20日(日) 15:00~ 京都コンサートホール・大ホール 作曲：マスカーニ 主演：小川里美、ワン・カイ 制作：京都コンサートホール (玉崎)
- ⑬歌劇『アイーダ』(栗国淳 演出) 3月6日(日) 14:00~ 滋賀県立芸術劇場・びわ湖ホール 作曲：ヴェルディ 指揮：沼尻竜典 制作：びわ湖ホール・神奈川県民ホール(共同) (服部)
- ⑭ミュージカル2010全国ツアー公演『クレージー・フォー・ユー』(M.オクレント・浅利慶太 演出) 3月2日(水) 13:30~16:30 中京大学文化市民会館・プルニエホール 指揮：上垣聡 制作：劇団四季 (玉崎・磯貝)
- ⑮ミュージカル『赤毛のアン』(浅利慶太 演出) 3月11日(金) 18:30~21:30 新名古屋ミュージカル劇場 振付：山田卓 主演：林香純、日下武史 制作：劇団四季 (玉崎)
- ⑯ミュージカル『ゾロ The Musical』(クリストファー・レンショウ 演出) 3月7日(月) & 19日(土) 12:00~15:30 中日劇場 脚本歌詞：スティーヴン・クラーク 翻訳：酒井洋子 訳詞：松田信行 音楽：ジプシー・キングズ 制作：東宝 制作協力：ゾロ・ロンドン・リミティッド(2008年ロンドン初演) (玉崎)
- ⑰能楽堂3月定例公演『清経』(金春流) 3月5日(土) 14:00~15:45 名古屋能楽堂 主演：本田光洋、鬼頭尚久、飯富雅介 企画制作：名古屋能楽堂 (磯野)
- ⑱サロン・オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(藪川直子 演出) 3月13日(日) 14:00~ 名古屋西文化小劇場 指揮：金正奉 主演：やまもとかよ、梅澤市樹 (磯野)

- ⑱オペラ『フォルテユニオ』（池田理代子 演出） 3月12日(土) 14:00～ なかのZERO大ホール
原作：A. ミュッセ 作曲：アンドレ・メサジェ 指揮：飯坂純 主演：高野二郎、江口二美（フランス語上演） 制作：東京オペラ・プロデュース (服部)
- ⑲オペラ『ばらの騎士』（J. ミラー 演出） 4月10日(日) 14:00～ 新国立劇場・オペラパレス
作曲：R. シュトラウス 指揮：M. マイヤーホーファー 制作：新国立劇場 (服部)
- ⑳演劇『トップガールズ』（鈴木裕美 演出） 4月23日(日) 18:00～ Bunkamuraシアター・コクーン
原作：C. チャーチル 主演：寺島しのぶ、渡辺えり、麻実れい 制作：シス・カンパニー (服部)
- ㉑ミュージカル『愛と青春の宝塚—恋よりも生命よりも』（鈴木裕美 演出） 3月27日(日) 13:00～
愛知県芸術文化センター愛知県芸術劇場・大ホール
原作・脚本・歌詞：大石静 曲：三木たかし 制作：フジTV、東宝、コマ・スタジアム (玉崎)
- ㉒ミュージカル『ウェディング・シンガー』（山田和也 演出） 4月9日(土) 12:00～ 中日劇場
台本：C. ベグリン & T. ハーリヒ 音楽：M. スクラー 歌詞：C. ベグリン 訳：飯島早苗 振付：
上島雪夫 音楽監督：八幡茂 主演：井上芳雄、上原多香子、樹里咲穂 制作：東宝 (玉崎)
- ㉓MET ライブビューイング『ランメルモールのルチア』（M. ジーママン 演出） 4月13日(水)
10:00～ ミッドランドスクエア 指揮：P. サマーズ 主演：ナタリー・デセイ (玉崎)
- ㉔演劇『日本人のへそ』（栗山民也 演出） 4月23日(土) 14:00～ パティオ池鯉鮒（知立市）
脚本：井上ひさし 振付：謝珠栄 音楽：小曾根真 制作：こまつ座 (玉崎)
- ㉕音楽劇『探偵—哀しきチェイサー』（マキノノゾミ 作・演出） 3月26日(土) 17:00～ 新神戸
オリエンタル劇場 曲：Coba（主題歌のみ）詞：阿久悠 曲：大野克夫 振付：南流石 主演：
沢田研二、高泉淳子 制作：ココロ・コーポレーション (安藤)
- ㉖能『班女』 4月17日(土) 名古屋能楽堂
作：世阿弥 主演：小松勝憲、杉江元 (磯野)
- ㉗演劇『デカメロン』（神宮寺啓 演出・舞台美術） 5月1日(日) 15:00～ 愛知県芸術劇場・小ホール
原作：ロベ・デ・ルエダ・アレハンドロ・カソーナ 訳・脚色：田尻陽一 主演：榊原忠美
制作：劇団クセック ACT (服部)

- ②⑨オペラ『愛の妙薬』 5月3日(火)・(祝) 18:00～ 名古屋市芸術創造センター
作曲：ドニゼッティ 主演：荒巻那月、古屋彰久 制作：稲葉地オペラ (名古屋音楽大)
(服部・玉崎)
- ③⑩音楽劇ツドエ meets 北九州 vol.6『わが星』(柴幸男 作・演出・演奏) 5月21日(土) 18:00～
北九州芸術劇場
音楽：三浦康嗣 主演：青木宏幸、大柿友哉 制作：ままごと /ZuQnZ (服部)
- ③①オペラ『ルチア』(岩田達宗 演出) 5月8日(日) 15:00～ テアトロ・ジージョ (川崎市)
作曲：G. ドニゼッティ 指揮：松下京介 主演：光岡暁恵 制作：藤原歌劇団 (玉崎)
- ③②演劇『セツツァンの善人』 5月22日(日) 名古屋市東文化小劇場 (橋詰)
- ③③MET ライブビューイング『オーリー伯爵』(B. シャー 演出) 5月8日(日) ミッドランドスクエア
指揮：M. ペニーニ指揮 主演：フローレス、ダムラウ (服部)
- ③④MET ライブビューイング『カプリッチョ』(J. コックス 演出) 5月15日(日) ミッドランドスクエア
指揮：A. デイヴィス 主演：フレミング、コノリー (服部)
- ③⑤音楽劇『変身』(山元清多 台本・演出) 4月28日(水) 18:30～ アートピアホール
原作：カフカ 音楽：林光 主演：大石哲史 制作：オペラシアターこんにゃく座 (服部)
- ③⑥演劇『欲望という名の電車』(松尾スズキ 演出) 5月10日(火) 18:30～ 名鉄ホール
原作：T. ウィリアムズ 訳：小田島恒志 主演：秋山奈津子 制作：パルコ (磯野)
- ③⑦メトロポリタン・オペラ『ラ・ボエーム』(J. デクスター 演出) 6月4日(土) 15:00～ 愛知県
芸術劇場・大ホール 作曲：プッチーニ 指揮：F. ルイジ 主演：B. フリットリ (酒井)
- ③⑧メトロポリタン・オペラ『ドン・カルロ』(ゼッフィレリ 演出) 6月5日(日) 15:00～ 愛知
県芸術劇場・大ホール 作曲：ヴェルディ 指揮：F. ルイジ 主演：M. ポプラフスカヤ (酒井)
- ③⑨歌劇『つばめ』(初版)(中村敬一 演出) 5月28日(土) 16:00～ アルカイックホール (尼崎市)
作曲：プッチーニ 指揮：寺岡清高 主演：上村智恵 制作：関西二期会 (服部)
- ④⑩オペラ『シンデレラ』(ミッシェル・ワッセルマン 演出) 6月25日(土) 15:00～ 長岡京記念文

化会館（長岡京市）

作曲：ロッシーニ 指揮：小崎雅弘 舞台監督：大谷みどり 舞台美術：京都舞台美術製作所 衣装：下斗米雪子 主演：小林久美子 制作：京都オペラ協会（服部）

④①音楽劇『真夏の夜の夢』（宮城聡 演出） 6月4日(土) 14:00～ 静岡芸術劇場
潤色：野田秀樹 音楽：棚川寛子 主演：本田麻紀 制作：SPAC（伊藤）

④②ミュージカル『MITSUKO ——愛は国境を越えて』（小池修一郎 脚本・演出） 5月28日(土)
12:00～ 中日劇場
音楽：ワイルドホーン 主演：安蘭けい 制作：梅田芸術劇場（橋詰・磯貝）

④③観世流『卒塔婆小町』 6月12日(日) 名古屋能楽堂（磯野）

④④METライブビューイング『イル・トロヴァトーレ』（D. マクヴィカー 演出） 6月3日(金) 10:00～ ミッドランドスクエア
指揮：J. レヴァイン 主演：アルバレス、ホヴォロストフスキー（玉崎）

④⑤演劇中西和久1人芝居『しのだづま考』（ふじたあさや 演出） 7月11日(月) 18:15～ 四日市市文化会館第2ホール（四日市演劇鑑賞会） 主演：中西和久 制作：京楽座（服部）

④⑥歌劇『ウィンザーの陽気な女房たち』（中村敬一 演出） 7月17日(日)・18日(月)・(祝) 14:00～ 滋賀県立芸術劇場・びわ湖ホール・中ホール
作曲：ニコライ 指揮：大勝秀也 主演：松森治、大澤健 制作：びわ湖ホール（玉崎・服部）

④⑦喜歌劇『こうもり』（広渡勲 演出） 7月17日(日)・22日(金) 14:00～ 兵庫県芸術文化センター・大ホール
作曲：ヨハン・シュトラウスⅡ 指揮：佐渡裕 主演：佐々木典子・小森輝彦 制作：兵庫県立芸術文化センター（服部・玉崎）

④⑧能『班女』 4月17日(日) 名古屋能楽堂（磯野）

④⑨ミュージカル『スウィーニー・トッド——フリート街の悪魔の理髪師』（宮本亜門 演出・振付）
7月3日(日) 13:00～ 愛知県芸術劇場・大ホール
作詞・曲：ソンドハイム 台本：ヒュー・ホーラー 主演：市村正親、大竹しのぶ 制作：ホリプロ（玉崎）

- ⑤⑩ミュージカル『ビクター・ピクトリア』（浜畑賢吉 演出） 7月30日(土) 13:00～ 森の宮ピロ
ティホール 作曲：H. マンシーニ 主演：貴城けい、下村尊則 制作：ビクター・ピクトリア制
作委員会 (玉崎・服部)
- ⑤⑪演劇『秘密はうたう』（マキノノゾミ 演出） 7月31日(日)14:00～ 兵庫県芸文センター・中ホー
ル 作：ノエル・カワード 訳：高橋知伽江 主演：村井国夫、三田和代、保坂知寿 制作：兵庫
県芸文センター (玉崎)
- ⑤⑫音楽劇『リタルランド』（G2 原案・演出） 8月5日(金) 18:30～ アートピアホール
音楽：荻野清子 主演：吉田鋼太郎、一路真輝 制作：キューブ&東宝 (服部・玉崎)
- ⑤⑬演劇『冬物語』（山崎清介 脚本・演出） 8月27日(土) 13:00～ 28日(日) 14:00～ 愛知県芸術
劇場・小ホール
主演：山崎清介、伊沢磨紀 制作：子供のためのシェイクスピア・カンパニー
(橋詰・服部・磯貝)
- ⑤⑭ミュージカル『はだかの王様』（浅利慶太 演出） 8月12日(金) 中京大学文化市民会館
原作：アンデルセン 台本：寺山修司 曲：三木たかし、いずみたく、宮川彬良、振付：謝珠栄、
篠井世津子 主演：江上健二、白澤友理、豊田早季、岡本隆生 制作：劇団四季（全国巡演）
(磯貝)
- ⑤⑮ミュージカル『夢から醒めた夢』（浅利慶太 演出） 8月14日(日)&8月21日(日) 13:00～ 新名古
屋ミュージカル劇場
原作：赤川次郎 曲：三木たかし 振付：加藤敬二 主演：岡村美南 制作：劇団四季
(磯貝・玉崎)
- ⑤⑯演劇『好色一代男』（岡本さとる 脚本・演出） 8月16日(火) 11:00～ 御園座
原作：井原西鶴 主演：片岡愛之助、愛原実花 制作：御園座 (磯貝)
- ⑤⑰オペラ『セビリアの理髪師』（松本重孝 演出） 9月10日(土)・11日(日) 15:00～ 新国立劇場・オ
ペラパレス
作曲：ロッシーニ 指揮：アルベルト・ゼツダ 主演：アントニーノ・シラグーザ 制作：藤原歌
劇団 (服部・玉崎)
- ⑤⑱ミュージカル『めぐり会いは再び』（マリヴォー原作『愛と偶然との戯れ』翻案）&レビュー『ノ

- パ・ボサノバ』 9月19日(月) 12:00～ 中日劇場
宝塚歌劇星組 主演：柚希礼音、夢咲ねね 制作：宝塚歌劇団 (磯貝・玉崎)
- ⑤9 オペレッタ『天国と地獄』(たかべしげこ 演出) 10月2日(日) 14:00～ 愛知県芸術劇場・大ホール 作曲：オッフエンバック 指揮：曾我大介 美術：志水良成 主演：やまもとかよ、荒川裕介 制作：名古屋二期会 (服部・安藤)
- ⑥0 りゅーとびあ能楽堂『ペリクリーズ』(栗田芳宏 演出) 9月23日(金) 東京公演：梅若能楽院会館 翻訳：松岡和子 主演：柄谷吾史、西村大輔 制作：りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館 (伊藤)
- ⑥1 MET ライブビューイング『ドン・カルロ』(N. ハイトナー 演出) 9月12日(月) 10:00～ 東劇 指揮：Y.Z. セガン 主演：R. アラーニャ、ポプラフスカヤ (玉崎)
- ⑥2 酒井正志氏のロンドン観劇報告リスト
- ⑥2-1 8月2日 *War Horse* (New London Theatre)
 - ⑥2-2 8月4日 Chichester Festival Theatre Production
Pygmalion (Garrick Theatre)
 - ⑥2-3 8月5日 *Much Ado About Nothing* (Wyndham's Theatre)
 - ⑥2-4 8月8日 *Woman Killed With Kindness* (National Theatre)
 - ⑥2-5 8月9日 *Mysteries* (Shakespeare's Globe)
 - ⑥2-6 *Anne Boleyn* (Shakespeare's Globe)
 - ⑥2-7 8月11日 *Cherry Orchard* (National Theatre)
 - ⑥2-8 8月13日 *Doctor Faustus* (Shakespeare's Globe)
 - ⑥2-9 8月19日 *Macbeth* (RSC)
 - ⑥2-10 8月20日 *The Homecoming* (RSC)
 - ⑥2-11 *A Midsummer Night's Dream* (RSC)
- ⑥3 ミュージカル『ロミオとジュリエット』(小池修一郎 演出) 10月8日(土)・19日(水) 13:30～ 梅田芸術劇場・メインホール
主演：城田優、フランク莉奈 制作：TBS、ホリプロ、梅田芸術劇場 (服部・玉崎)
- ⑥4 オペラ『トスカ』(M. オタヴァ 演出) 10月10日(月)・(祝) 17:00～ 愛知県芸術劇場・大ホール
作曲：プッチーニ 主演：ノルマ・ファンティーニ 制作：プラハ国立歌劇場 (玉崎・酒井)
- ⑥5 演劇『アントニーとクレオパトラ』(蜷川幸雄 演出) 10月21日(金) 彩の国さいたま芸術劇場・大

- ホール 翻訳：松岡和子 美術：中越司 主演：吉田鋼太郎、安蘭けい 制作：埼玉県芸術文化振興財団、ホリプロ (伊藤)
- ⑥⑥ ミュージカル『眠れぬ雪獅子』(謝珠栄 演出) 10月22日(土) 18:30～ 世田谷パブリックシアター・11月6日(日) 13:00～ 兵庫県芸術文化センター・中ホール
音楽：玉麻尚一 主演：東山義久、伊礼彼方 制作：TS Musical Foundation (服部・玉崎)
- ⑥⑦ オペラ『スザンナの秘密』(古澤利人 訳・演出・主演) 10月19日(水) 11:30～ 宗次ホール
作曲：ヴォルフ＝フェラーリ 制作：宗次ホール (服部)
- ⑥⑧ 吉例顔見せ歌舞伎 10月1日(土)～25日(火) 11:00～・16:30～ 御園座
演目 昼の部：南総里見八犬伝(芳流闇の場、利根川の場)、一條大蔵譚(檜垣、奥殿)、三代目中村又五郎・四代目中村歌昇襲名披露口上、寿曾我対面
夜の部：双蝶々曲輪日記(角力場)、棒しばり、助六由縁江戸桜(河東節十寸見会御連中)
主演：吉右衛門、梅玉、團十郎、左團次 制作：松竹 (磯貝)
- ⑥⑨ 文楽『双蝶々曲輪日記』八幡里引窓の段、『新版歌祭文』野崎村の段(昼の部)、『団子売』、『摂州合邦辻』合邦住家の段(夜の部) 10月14日(金) 11:00～・16:00～ 名古屋市芸創センター
主演：吉田蓑助、桐竹勘十郎 企画制作主催：文楽協会 (磯貝)
- ⑦⑩ ミュージカル『BLUES IN THE NIGHT』(吉川徹 演出) 10月30日(日) 13:00～ 御園座
翻訳・訳詩：竜真知子 音楽監督：山口琢也 主演：森公美子、ジェロ 制作：コマ・スタジオム (磯貝)
- ⑦⑪ 演劇『さながらアラスカ』&『ビクトリア駅』 10月28日(金)・10月30日(日) スタジオ・座・ウィークエンド
作：ハロルド・ピンター 制作：演劇創造αの会 (伊藤・服部)
- ⑦⑫ MET ライブビューイング『アンナ・ボレーナ』(D. マクヴィカー 演出) 11月11日(金) 10:00～ ミッドランドスクエア
指揮：M. アルミリアート 主演：ネトレプコ (服部・玉崎)
- ⑦⑬ 演劇『アマデウス』(松本幸四郎 演出・主演) 11月10日(木) ル・テアトル銀座
作：P. シェーファー 制作：松竹 (酒井)

- ⑦④演劇『猟銃』（フランソワ・ジラール 演出） 11月23日(水) 17:00～ 名鉄ホール
原作：井上靖 主演：中谷美紀 制作：パルコ & USINEC (Montreal) (服部・玉崎)
- ⑦⑤ミュージカル『ニューヨークへ行きたい』（山田和也 演出） 11月28日(月) 13:00～ 梅田芸術劇場・メインホール 曲：U. ユルゲンス 脚本：G. バリリ 共同脚本：C. ストルベック 歌詞：ミヒャエル・クンツェ 翻訳：迫光 訳詞：高橋亜子 上演台本：飯島早苗 美術：大田創 主演：瀬奈じゅん 制作：東宝 (玉崎)
- ⑦⑥歌劇『ドン・ジョヴァンニ』（C. グルーバー 演出） 12月4日(日) 14:00～ びわ湖ホール・大ホール 作曲：モーツァルト 指揮：沼尻竜典 主演：増田のり子、佐々木典子、嘉目真木子 制作：びわ湖ホール、東京二期会、ライン・ドイツ・オペラ (共同) (服部)
- ⑦⑦喜歌劇『こうもり』（飯塚勲生 演出） 12月10日(土)・11日(日) 14:00～ 長久手文化の家・森のホール 作曲：ヨハン・シュトラウスII 指揮：佐藤正浩 制作：愛知県立芸術大学大学院 (磯貝・服部・玉崎)
- ⑦⑧ミュージカル『ウィキッド』（ジョー・マンテロ 演出） 12月14日(水)・12月29日(木) 13:30～ 新名古屋ミュージカル劇場 作曲：S. シュワルツ 主演：山本貴永・江畑晶慧 制作：劇団四季 (玉崎・磯貝)
- ⑦⑨ミュージカル『A Song for You』（菅野こうめい 演出） 12月21日(水) 13:00～ 中日劇場 曲：カーペンターズ 上演台本・作詞：菅野こうめい 脚本・作詞：鈴木聡 主演：川平慈英、春野寿美礼 制作：アトリエ・ダンカン (玉崎)
- ⑦⑩ Punk 歌舞伎『リア王』（原智彦 演出） 12月23日(金) 名古屋能楽堂 (安藤)

II. 2011年全国上演作品

(1) オペラ (Our Selection)

月	劇場	作品名	演出家	指揮者	キャスト	制作団体	参照番号
2	京都コンサートホール	イリス	井上道義	井上道義	小川里美、 ワン・カイ	京都コンサートホール、 京都市交響楽団	⑫
3	びわ湖ホール	アイーダ	栗国 淳	沼尻竜典	福井 敬	びわ湖ホール	⑬
4	なかのZERO	フォルテユニオ	池田理代子	飯坂 純	高野二郎、 江口二美	東京オペラ・プロ デュース	⑰
	新国立劇場	ばらの騎士	J. ミラー	M. マイヤーホー ファー	A. ベーング、 F. ハブラタ	新国立劇場	⑳
5	名古屋市芸術センター	愛の妙薬		柴田 祥	古屋彰久	稲葉地オペラ (名古屋音楽大学)	㉔
	テアトロ・ジージオ	ルチア	岩田達宗	松下京介	光岡暁恵	藤原歌劇団	㉑
	アルカイックホール	つばめ	中村敏一	寺岡清高	上村智恵	関西二期会	㉙
6	東京文化会館	ルチア	M. ジーマーマン	ジャンンドレア・ ノセダ	ディアナ・ダムラ ウ	メトロポリタン・オ ペラ	
	愛知県芸術劇場	ドン・カルロ	ゼッフィレッシ	F. ルイジ	M. ポプラフスカ ヤ	メトロポリタン・オ ペラ	㉘
7	兵庫県芸文センター	こうもり	広渡 勲	佐渡 裕	佐々木典子、 小森輝彦	兵庫県芸文センター	㉟
	びわ湖ホール	ウィンザーの陽気な 女房たち	中村敏一	大勝秀也	びわ湖声楽アンサ ンプル	びわ湖ホール	㉞
9	新国立劇場	セピリアの理髪師	松本重孝	アルベルト・ゼツダ	アントニーノ・シ ラグーザ	藤原歌劇団	㉟
10	愛知県芸術劇場	トスカ	M. オタヴァ	ジョルジョ・ク ローチ	ノルマ・ファン ティーニ	プラハ国立歌劇場	㉡
	宗次ホール	スザンナの秘密	古澤利人	神崎真弓(ピアノ)	古澤利人	宗次ホール	㉢
12	びわ湖ホール	ドン・ジョヴァンニ	C. グルーバー	沼尻竜典	佐々木典子、 嘉目真木子	びわ湖ホール	㉦
	長久手文化の家	こうもり	飯塚励生	佐藤正浩	松下伸也、 能勢健司、院生	愛知県芸大大学院	㉧

(2) ミュージカル (Our Selection)

月	劇場	作品名	歌詞/台本作家・作曲家	演出家	振付家 (or staging)	装置 or 美術	衣装	音楽監督・指揮	主演	制作団体	備考
1	宝塚大劇場	ロミオとジュリエット	台：D. ライト、 曲：G. プレスギルヴィック、 歌詞：M. コリー	小池修一郎	御織ゆみ乃、 若央りさ、 Kazumi-Boy、 桜木涼介	大橋泰弘 (置)	有村 淳 (衣)	大田 健 (音)	音月 桂、 舞羽美梅、 夢華あみ	宝塚歌劇団	①
	兵庫県立文芸センター	COCO ココ	脚・歌詞：A.J. ラーナー、 曲：A. プレグリン	G2	前田清美 (振)	松井るみ (美)	十川ヒロコ (衣)	荻野清子 (音)	鳳 蘭、 彩吹真央、 岡幸二郎	Quaras (2010の再演)	
3	中京大学文化市民会館	クレイジー・フォー・ユー	作詞&曲：G.&L. ガーシェイン 台本：K. ルドウィッグ	M. オクレント & 浅利慶太	S. ストロマン	R. ワグナー (置)	W.I. ロング (衣)	上垣 聡 (指揮)	荒川 務、 秋 夢子	劇団四季 (2010全国巡演)	⑭
	中日劇場	ゾロ The Musical	台&歌詞：S. クラーク、 曲：Gypsy Kings	C. レンショウ	R. アマルゴ	T. バイバー (置)	T. バイバー (衣)、 坂井 麗 (衣)	山口琢也	坂本昌行、 大塚ちひろ、 石井一孝	東宝	⑯
3	俳優座劇場	音楽劇 わが町	T. ワイルダー作・鳴 海四郎翻訳・上田亨 音楽・宮原芽映作詞	西川信廣				上田 亨	土居祐子、 原 康義、 瀬戸口都	俳優座劇場	
	新神戸オリエンタル劇場	探偵——哀しきチェイサー	台：マキノノゾミ、 歌詞：Coba 曲	マキノノゾミ	南 流石	奥村康彦 (美)	三大路志保美 (衣)	久保祐子 (演奏・ピアノ)	沢田研二、 高泉淳子	ココロ・コーポレーション	⑳
	愛知県芸術劇場	愛と青春の宝塚	台&歌詞：大石静、 曲：三木たかし、高 橋知加江作詞	鈴木裕美	前田清美、 本間憲一	島川とおる	有村淳	清水恵介	真琴つばさ、 貴城けい	フジテレビジョン、 東宝、 コマ・スタジアム	㉒
4	帝国劇場	レ・ミゼラブル	台：A. ププリル、 曲：C.M. シェンベルグ、 歌詞：H. クレツマー、 訳：酒井洋子	T. ナン & J. ケアード	K. フラット (staging)	J. ネビア (置)	A. ネオフィ トウ (衣)	塩田明弘 (指揮)	山口裕一郎、 岡幸二郎 その他	東宝 (4/8~6/12までロ ンドン初演版の最 終公演)	
	パティオ池鯉鮒	日本人のへそ	台&歌詞：井上ひさ し、音楽：小曾根真	栗山民也	謝 殊 栄	妹尾河童 (美)	渡辺園子 (演奏・ピアノ)	小曾根真 (音響)	石丸幹二、 笹本玲奈、 辻 萬長	こまつ座	㉔
5	北九州芸術劇場	わが星	作・演奏：柴 幸男	柴 幸男		青木拓也 (美)	伊藤泰行 (照)	三浦康嗣 (音楽)	青木宏幸、 大橋友哉	ままごと / ZuQnZ	㉖
6	世田谷パブリックシアター	ベッジ・バードン	作：三谷幸喜	三谷幸喜		種田陽平 (美)	伊藤佐智子	井上正弘 (音響)	野村萬斎、 深津絵里、 大泉 洋	シス・カンパニー	
	ル・テアトル銀座	リトル・プリンス 2011	作：A.de S. テグジュベリ ワームホールプロ ジェクト、高田 浩、 金子浩介、山口琢也	ワームホール プロジェクト	上島雪夫	朝倉 摂	朝倉 摂、 原まさみ	高田 浩、 金子浩介、 山口琢也 (音楽)	高野奈々、 広田勇二、 秋元みな子	音楽座	
7	森の宮ピロティホール	ビクター・ビクトリア	台：B. エドワーズ、 曲：H. マンシーニ (一部ワイルドホーン)、 歌詞：L. ブリカッセ	浜畑賢吉	本間憲一	斉藤浩樹 (美)	十川ヒロコ (衣)	宮崎 誠	貴城けい、 彩吹真央、 下村尊則	ビクター・ビ クトリア制作 委員会	㉙
8	アートピアホール	リタルランド	台：中島淳彦、曲：荻 野清子、歌詞：瓜生 明希葉、	G2		中根聡子 (美)	前田文字 (衣)	荻野清子	吉田綱太郎、 一路真輝、 高橋由美子、 伊礼彼方	キューブ、 東宝	㉚
	新名古屋ミュージカル劇場	夢から醒めた夢	原作：赤川次郎、 台本・作詞：浅利慶太 & 奈良和江	浅利慶太	加藤敏二 & 謝 殊 栄	土屋茂昭 (置)	大栗未来 (衣)	渋谷森久	岡村南美、 勝田理沙	劇団四季	㉜
9	日生劇場	三銃士	原作：デュマ、 台：中島淳彦、 曲：NAOTO	田尾下哲				時任康文	嵐太、 松島健市郎、 佐藤弘道		
10	ル・テアトル銀座	想い出のカルテット	作：R. ハーウッド、 訳：丹野郁弓	高橋昌也		高橋昌也 (美) 沢田祐二 (照明)	高須はな子 (衣)	高橋 巖 (音響)	黒柳徹子、 阿知波悟美、 団 時朗、 鶴田 忍	バルコ	
	座・高円寺1	ユーリントウン	脚本&詞：G. コティス 曲&詞：M. ホルマン 訳：吉原豊司 訳詞：浅井さやか 台本：坂手洋二	流山児祥	前田清美	水谷雄司 (美)		荻野清子 (音監・piano) 浅井さやか (歌唱指導)	別所哲也、 伊藤弘子	流山児★事務所	
	御園座	ブルース・イン・ザ・ナイト	翻訳訳詩/作詞： 竜真知子	吉川 徹	玉置千砂子	松井るみ (美)	宇野善子 (衣)	山口琢也	森公美子、 湖月わたる、 ジェロ	コマ・スタジアム	㉙
	世田谷パブリックシアター	眠れぬ雪獅子	大谷美智浩原作、台： T.S.、玉麻尚一 (音)	謝 殊 栄	謝 殊 栄	松井るみ (美)	西原梨恵 (衣)	玉麻尚一 (音・keyboard)	東山義之、 伊礼彼方、 小西遼生	TSミュージカル・ ファンデーション	㉞
梅田芸術劇場	ロミオとジュリエット	台：D. ライト、曲： G. プレスギル ヴィック、歌詞： M. コリー	小池修一郎	増田哲治	二村周作 (美)	岩谷俊和 (衣)	太田 健 (音)	城田優、 フランク莉奈	TBS、 ホリプロ、 梅田芸術劇場	㉟	

III. 2011年オペラ&ミュージカル公演評

(1) 2011年オペラ上演の動向

2011年は、MET ライブビューイングで新たなファンを獲得しているメトロポリタン・オペラハウスをはじめとする、10の海外のオペラ団体がスター歌手をそろえて来日公演をするはずだった。ところが、3月11日の東北地方を襲った大震災はオペラ上演にも大きな影響を及ぼした。

劇場の建物が一部壊れ、安全が確保できないことを理由に中止となった公演がある一方で、震災後2つの団体が来日をやめ、フィレンツェ歌劇場は余震と原発事故を理由に、残されていた公演を中止し、帰国してしまった。5年ぶりに来日したメトロポリタン・オペラは、スター歌手のネトレプコやカウフマン、芸術監督レヴァインの不参加で、スター歌手に期待していたファンをがっかりさせた。結局、『ラ・ボエーム』 ミミ役のネトレプコの代わりにフリットリが、『ドン・カルロ』 エリザベッタ役のフリットリの代わりにポブラフスカヤが歌った。彼女は声がよく、強い声を求めるエリザベッタ役に合っている。他にもキャストの変更がなされたが、ドミンゴも来日し、何とか格好を付け成功したといえる。ダムラウが主役を務めた『ルチア』やルネ・パーペが出演した『ドン・カルロ』も好演だった。

ボローニャ歌劇場の来日公演は、不慮の事故で亡くなった『エルナーニ』のリチートラの件は別にして、スター歌手が軒並み「体調不良」で来日しなかった。『清教徒』ではフローレスの代わりにシラゲーザが歌ったが、評判は今一つだった。他の代役もあまり成功したとはいえない。上演が良ければ、観客は新しいスターの誕生にも立ち会えるが、客寄せのための有名スター歌手をキャストにした来日公演チケットは高い。観客の側に不満が残ったと同時に、スター歌手中心の公演のあり方に疑問が残った。

新国立劇場も外国人歌手をソリストに多く起用しているので、キャスト変更を余儀なくされた。3月いっぱい公演を中止した後、4月の演目『ばらの騎士』は、外国人ソリストのキャンセルが相次ぐなか、初日を遅らせて体制を整え開演した。オリジナルキャストのフランツ・ハヴラタはオックス男爵役を演じて、本場のウィンナワルツを聴かせて大喝采を浴びた。また、穴を埋めた日本人歌手は、多少声が小さかったがアンサンブルもきれいでもとても良かった。外国人でキャストを補強しなくても、実力のある日本人歌手がもっと起用されてしかるべきだと思った。4月10日の初日は、劇場が非常に華やかで関係者も観客も劇場再開に安堵している様子だった。

東京オペラプロデュースのメサジェ作曲『フォルテュニオ』は、震災直後の3月12日・13日の公演だった。13日公演のゲネプロ最中に地震が起き、半ばぶっつけ本番であったという。「公演中止も考え悩んだが安全も確保できたし、このようなときこそで自分たちの出来ることをきちんとする」と主催者から挨拶の後、予定通り開演した。駅には帰宅難民があふれ、観客席は半分も埋まっていなかったが、余震が続く中の珍しいフランスオペラの熱演だった。しかし、フクシマの原発問題が顕在化する前だったので、上演可能だったのかもしれない。この後、多くの公演が余儀なく中止・延期を

したが、同時に、オペラ上演など文化事業の意義を考察する契機となった。

今年度上演作品を振り返ってみたい。今年もオペラの定番『ラ・ボエーム』『ルチア』『セビリヤの理髪師』『ドン・ジョヴァンニ』『こうもり』『愛の妙薬』は様々に上演された。プッチーニの作品は集客しやすいのか上演数が一番多い。プラハ歌劇場『トスカ』は、オーラのあるトスカ役ファンテーニの名歌唱が印象的だった。藤原歌劇団の『セビリヤの理髪師』はアルベルト・ゼッタによる新改訂版の日本初演となったので、高橋薫子の歌うロジーナの aria は初めて聴く曲だった。公演では、ロッシーニテノールのシラクエザが大活躍した。リヒャルト・シュトラウスの作品『サロメ』『ばらの騎士』『影のない女』が二期会、新国立劇場、マリインスキー劇場により上演されたがこの傾向は数年前からである。また、マイナーな作品が関係者のこだわりと努力と研鑽の賜として多数上演されている。『イリス』は指揮と演出を兼ねた井上道義の熱演が伝わってきた。その他の上演作品名を挙げると、『ラファヴォリータ』『中国の不思議な役人』『ねじの回転』などである。メノッティの作品も2011年は生誕100年のため複数上演された。日本の作曲家の作品も多数上演された。「東京文化会館50周年記念フェスティバル」の記念オペラである黛敏郎作曲『古事記』（日本初演）、池辺晋一郎作曲『高野聖』（日本オペラ振興会）、新国立地域招聘公演『鳴砂』（仙台オペラ協会）、梶俊男作曲『班女』などである。

新しい試みを継続している団体は芸術監督がチームを率いて上演を成功させている。北とびあ音楽祭では寺神戸亮が、『コジ・ファン・トゥッテ』を古楽の形式で上演し、コンサート形式ながら表現力豊かな歌手たちによってモーツァルトのすばらしい世界が現前した。びわ湖ホール沼尻竜典、兵庫芸術文化センターの佐渡裕、オーケストラアンサンブル金沢の井上道義も、それぞれ企画・演奏等で活躍している。さらに、びわ湖ホールは二期会と『ドン・ジョヴァンニ』を、神奈川県民ホールと『アイダ』を制作・上演している。自主制作・上演では資金が不足するからである。企業からの寄付が減少する状況では、力ある芸術監督の下、良い作品を共同で制作・上演という方向が今後も続くものと思われる。

多くの団体が自主制作に苦しむなか、兵庫芸術文化センターの『こうもり』は8公演をほぼ完売した。良い歌手、良い指揮者と楽団、良い演出など企画面に加えて、関西のオペラ受容の広がりを感じた。関西圏では、みつなかオペラ、堺オペラ、関西二期会、長岡京オペラ、いずみホール、カレッジオペラハウスなどが精力的にマイナーな作品も取り上げて上演を行っている。

近年演劇畑出身の演出家がオペラの演出を手がけるようになってきた。オペラを歌中心でなく、ドラマとして観客に提示しようとするこの傾向は、ますます顕著である。岩田達宗、串田和美、白井晃、鶴山仁、宮田慶子などの活動に来年以降も目が離せなくなるだろう。ただ、ドラマの整合性を提示しようとするあまり、説明過剰となり音楽を損ねる可能性もある。演劇としての楽しみがオペラの観客層を広げる可能性もあるが、びわ湖ホールの『ドン・ジョヴァンニ』はカロリーネ・グルーパーの現代的演出でストーリーがわかりにくかった。しかし、美声の日本人歌手たちの歌とトウキョウモーツァルトプレイヤーズの作り出す音楽はすばらしく、満足であった。一方、『つばめ』『ウィンザーの陽気な女房達』の中村敬一や『アイダ』の栗国淳など音楽に精通している演出家も健在であ

る。彼らが演出したオペラは音楽の知識に裏打ちされた手堅さがあり安心して観ていられた。

その他、今年度の話題として挙げられる日本人歌手は、昨年静岡オペラコンクールを受賞し『ルチア』でタイトルロールを歌った光岡暁恵、『こうもり』など多数のオペラに出演した佐々木典子、ドイツ在住の小森輝彦、『コジ・ファン・トゥッテ』の森麻季である。また、地方のオペラ上演に関して広島をオペラの町にしようと試みている広島が元気であることを指摘しておきたい。

一方、名古屋のオペラ事情は寂しかった。震災の影響で2つの来日公演が中止となったばかりでなく、もともと上演予定が少なかったのである。愛知県芸術文化センターに中規模のオペラを行うホールがないことも理由かもしれない。名古屋二期会『天国と地獄』は大ホールで上演されたが空席が目立ち、また、歌手も声を飛ばそうと無理をしてしまうように感じた。長久手オペラは今年ガラコンサートが開かれたのみだった。名古屋近郊には3つの音楽大学があり、それぞれ大学院オペラ等で若い歌手の卵たちががんばっている。そのがんばりを支えることができるような場と機会が名古屋でもっと提供されても良い。

オペラ上演はまず音楽が良くなければならない。スター歌手でなくても、美声の歌のうまい歌手とアンサンブルの良い楽団が活躍することになるだろう。不況と震災の自粛の中空席が目立った劇場に再び客を取り戻すには、企画を練って、良い公演をチームプレーで制作するという王道しかない。それには健全財政が必要なことは言うまでもない。 (服部 記)

(2) 2011年ミュージカル上演の動向

2011年のミュージカル来日公演は、原発震災の影響で公演や歌手のキャンセルが続出したオペラと違い、3月の『ヨセフ・アンド・ジ・アメージング・テクニカラー・ドリームコート』は震災前に16公演のうち10公演が行われ、夏の『コーラスライン』が1ヶ月近く順調に行われたが、共に本場ならではの魅力で圧倒するものではなかった。それよりも1986年初演版『レ・ミゼラブル』が25年間のスター達が次々と出演する最終公演で人気をさらった。

2011年の翻訳新作初演は、『レ・ミゼラブル』のごとく、ロンドンを初めとする欧州ものであったのが、注目される。新春から始まった『ゾロ・ザ・ミュージカル』は、2008年ロンドン発とは言え、圧政に立ち向かうヒーロー役坂本昌行の好演を顔色なからしめる来日フラメンコ・ダンサー達とジプシー・キングズの音楽から南欧色濃いミュージカルであった。次に、パリ2001年初演の宝塚版『ロミオとジュリエット』は、秋に同じ小池修一郎潤色・演出による男女共演版となり、華やかに幕を開けた。だが、宝塚版からむしろパリ初演版に戻り現代ヴェローナの若者達の生きざまを反映した舞台となっていた。今後さらに日本版として練られた演出によって再演され続けるミュージカルとなつてほしい。また夏の東宝の『三銃士』(オランダ初演)、秋には『ニューヨークへ行きたい』(ウィーン初演、これらは喜劇)と再演『ダンス・オブ・ヴァンパイア』(ドイツ初演版)と、翻訳ミュージカル公演は、ホリプロの『ドラキュラ』(2004年アメリカ初演作をグラーツ版から)も含め欧州版に基づいており、2011年はアメリカではなく欧州系ロック・ミュージカルに席卷されたと言える。スター俳優と豪華な装置・衣装の華やかな大作ミュージカルとはいえ、はたしてこの内どれだけ再演される

名作になるか疑問である。

むしろ、大劇場版でなく小劇場で、少人数キャストで公演された小品に好演が多かった。『スリル・ミー』（栗山民也演出）、『想い出のカルテット』（黒柳徹子と阿知波悟美の好演）が良かったし、『三銃士』も、帝劇の豪華上演よりも、日生劇場の中島淳彦脚本による『三銃士』がより名演だった。同じ中島淳彦脚本でG2原案・演出による音楽劇『リタルランド』は認知症という重い主題を扱いながら、吉田鋼太郎の歌唱も含めての名演、また優れた共演者達により、涙々の感動を呼んだ。吉田鋼太郎は蜷川演出『アントニーとクレオパトラ』でも名演であった。今年上演された3本の『ピアフ』中で栗山民也演出『ピアフ』の主演大竹しのぶが素晴らしくその名演技が歌唱にも生かされていた。またオフ・ブロードウェイからの小品*Blues in the Night*も4人の俳優それぞれの歌唱が見事でショウの魅力を見せてくれた（名古屋は実は大劇場公演）。

ストレート・プレイだが三谷幸喜作・演出らしく音楽の重要な新作、シス・カンパニー公演『ベッジ・パードン』も世田谷パブリックシアターの親密な空間を生かした少人数キャストで、野村萬斎がロンドン留学中の夏目漱石を演ずる喜劇は、2011年上半期最高の収穫と言われるほどの名公演であった。

俳優座の『わが町』は、演出の西川信廣と音楽の上田亨が長くあたためたものだけに、音楽を巧みに生かした舞台は、新国立の『わが町』よりはるかに優れた音楽劇公演だったが、さらに『わが町』を宇宙空間に発展させた柴幸夫作・演出『わが星』は、ラップ風の音楽とダンスやマイムの動きが地球の自転と重ねられた巧みな演出で魅了された。

井上ひさし追悼ファイナル・こまつ座の『日本人のへそ』は、東北の貧しい娘が、上京し浅草のヴォードヴィル劇場を出発に転落ともいえる人生を生き延びるドラマだが、現実には負けない庶民の力が描かれる。また栗山民也の演出は、ピアニスト小曾根真が優れた音楽と共にドラマ上での驚きも提供する公演となっていた。同じ井上ひさし作の『父と暮らせば』は、原発の被災に揺れる今年の日本では、こまつ座のみならず地方でも多くの劇場で夏に公演された。名古屋では劇座の好演があった。北村想の名作『寿歌』も震災に合わせてタイムリーと考えられ、多くの劇団がとりあげた。

2010年に名古屋の新鋭作家鹿目由紀の作品を上演した流山児祥★事務所の『ユーリントウン』再演は、初演をさらに超え優れたミュージカルになったと好評だった。流山児は、またミュージカルの高いチケットを問題視し、劇団としては辛い低料金で提供している。

シリアスで暗いミュージカルが優勢な傾向の中であって、昔ながらのミュージカル・コメディの再演として、『クレージー・フォー・ユー』（劇団四季全国巡演版）と、『ビクター・ビクトリア』は、観客に幸福を与えるものであった。謝珠栄が主宰するTSミュージカル・ファンデーションの『風を結んで』（再演）に続く新作『眠れる雪獅子』は、悲劇であるのに、観終わって観客に幸福感と希望を与えてくれた。王を暗殺する若者と真実を文字により後代に伝えようとする若者が、輪廻で蘇る。2組の若者の友情と文字の力を暗示するサンسكريット文字の映像が映る傾斜のついた簡素な舞台を照明、映像で様々な場面にスピーディに変えていく。謝珠栄の集中訓練の成果により、若い俳優達が見事なダンスと演技を披露した。だが歌には弱点ある彼らに比して、ミュージカル界ベテランの保坂

知寿と今井清隆はさすがの美声と名唱で感動させた。優れたオリジナル・ミュージカルとして、今後も再演が続くことを期待したい。

『愛と青春の宝塚』（再演）も戦争中の数多くの苦難を描きながら、宝塚ガール達の舞台に対する情熱を描く見事な歌とダンスの舞台で、これも再々演を期待したい。

次に優れた日本製オリジナル・ミュージカルを作り続けている、ミュージカル劇団わらび座の新作『おもいでぼろぼろ』も、音楽座ミュージカルの『リトル・プリンス』（2011年新作）も、共に創作ミュージカルの名作であった。劇団四季の『夢から醒めた夢』は子供ミュージカルを超えて一般対象のオリジナル作品になったものといえる。ヒロイン役岡村美南が魅力的であった。

劇団四季の名古屋での新作上演『ウィキッド』は舞台美術、衣装はトニー賞受賞作らしく優れたものだったが、ドラマ的にはまだ演出を練る必要があると思われた。

富山市オーバード・ホールでオーディションで選ばれた市民と富山出身のベテラン剣幸を中心に上演しているミュージカル名作公演（2011年は『回転木馬』、2012年は『ハロー、ドゥリー』日本初演）を、地方発信の市民ミュージカルの実現として賞賛したい。名古屋でも毎年名古屋市文化振興事業団主催による市民ミュージカルまたはオペレッタが上演されているのだが、2010年に開府400年記念により複数公演だったため、2011年には小規模なコンサート公演に終わった。今後は期待したい。また静岡県芸術劇場は民衆の力を見せる世界的な公演と催しが斬新で、市民を巻き込んだ芸術祭となっている。これらの公演がミュージカルを発展させていくことを期待したい。

2011年は、日本製ミュージカルまたは、音楽劇そして音楽が重要なファクターを占める演劇公演が、優れた公演となった。海外来日公演の少なさと共に、これが震災の影響なのかもしれない。今後名作として再演が期待されるミュージカル翻訳公演は、その結果、大作や大劇場上演作よりも、庶民の力と愛を歌い、演出に優れた作品となったといえよう。 (玉崎 記)

IV. 短評選

観劇した作品についての短評をいくつか紹介する。

番号は「I. アート・クリティック2011年に報告された観劇演目リスト」の参照番号である。

⑬びわ湖ホールプロデュースオペラ『アイダ』 びわ湖ホール・神奈川県民ホール・東京二期会・谷桃子バレエ団・神奈川管弦楽団共同制作

指揮：沼尻竜典 演出：粟国 淳 装置：アレッサンドロ・チャンマルーギ 照明：笠原俊幸

2011年3月6日14:00開演を鑑賞。上演に先立ち当日10:00より大ホールでのワークショップに参加した。内容は演出家が語る『アイダ』と第3幕のステージ見学であった。

演出家粟国淳が「装置と衣装を一緒にデザインしてイタリアの『アイダ』を作ってもらいたかった」とチャンマルーギの起用理由について語った。このコンビは昨年の愛知県『ホフマン物語』でも仕事をしている。二人はこのオペラのどこに焦点を当てるか長時間議論をした末に、アイダ、アムネリス、ラダメス3人の恋物語を、個人と文明や権力・規範との軋轢によって語られる悲劇とすることにしたという。装置は、古代エジプトの神殿をベースとした、舞台天井近くまで伸びた石柱の幾何学的なラインで構成されている。

壮大な石の神殿は、古代エジプト文明の象徴で、石柱は人々を対立させたり行動を阻んだりする規範であり、ときに障壁となる。エジプト人の極彩色の衣装や小道具には金箔が豪華に使われている。一方砂漠の民、エチオピア人は流浪の民として無彩色のぼろを纏い対照的に造型されている。舞台は場面転換するたびに、石柱と神殿の配置転換がなされ、照明が様々な陰影を生み出す。そして登場人物の舞台での立ち位置が物語を展開させていく。エチオピア王でアイダの父アモナズロが、娘に祖国への愛か恋人への愛か選択を迫るとき、彼は舞台中央に立ち、娘の行く手を阻む。神官たちは青白い光に照らされた神殿内部でラダメスを裁くが、その冷酷な様子はアムネリスからも客席からも見えない。終幕、地下牢で死を迎えるラダメスとアイダ、地下牢を閉ざした石の上で愛する男の死後の平安を願うアムネリスの立ち位置と照明が、それぞれの立場と現世での絶望と希望を見事に示していた。戒律に従う国家も父も規範である。それらに縛られ、翻弄される人々の物語を描きだす演出意図は隅々まで行き渡っていた。

びわ湖声楽アンサンブルと二期会合唱団による合唱は、物語の語り手として気高く美しく響きすばらしかった。それに比してソリストたちの歌は幾分小粒に感じられた。大きな物語を強調した演出意図の結果なのか歌手の力量なのかは不明である。両日に出演した伝令役の二塚直紀は張りのある美声でこれからの活躍が期待できそうである。

谷桃子バレエ団による多彩な踊りも楽しめ、『アイダ』がグランドオペラの形式で作られていることをあらためて確認できた。さらに指揮の沼尻は、管弦楽曲を指揮するようにマニャックで細かな陰影まで表していた。

このオペラは、3月末に神奈川県民ホールでの上演が予定されていたが、東北地方太平洋沖地震により中止となった。事情は事情として、残念に思った人が多くいると思われる。

(服部 記)

⑩『ゾロ The Musical』 3月19日(土) 12:00~15:30 中日劇場 (3月5日~20日上演)

2008年ロンドン初演ミュージカルの日本版初演である。ロンドン公演の演出家、振付家が東京公演カーテン・コールで挨拶した事実から、例によって海外舞台をそのまま模した公演と思われる。大好評の日生劇場での1ヶ月半公演に続き、中日劇場で名古屋としては長い15日間の公演である。

物語は典型的な冒険もので、『紅はこべ』(最近の宝塚版『スカーレット・ピンパーネル』の源)を原型とし、正体を隠し、悪と闘うヒーローを描く。『スーパーマン』や『スパイダーマン』は、『ゾロ』の映画(1920)を基にする。

舞台は19世紀初頭スペイン植民地だったカリフォルニアの田舎の村。だが、村人は新総督ラモンの専横と暴虐に苦しんでいる。そこで前総督の息子でスペイン留学中のドン・ディエゴが帰国し、黒マント、黒帽子、黒仮面の剣の達人怪傑ゾロとなって、正義の剣を揮う。変装を見破られないようディエゴはラモンの前では軟弱な男を装う。幼なじみの恋人ルイサはディエゴに呆れ、変装のゾロを恋するようになる。だが旅芸人一座を率い遠くスペインからついて来たジプシー娘イネスもいる。最後は、ディエゴがラモンを倒し、死んだと思われた総督アレハンドロを地下牢から救い出し、ゾロの正体を知ったルイサと恋が実り、ハッピーエンド。

ロンドン制作ミュージカルにもかかわらず、主人公の死で終わる『レ・ミゼラブル』や『エビータ』とは異なり、これはコメディ仕立てである。だがブロードウェイのミュージカル『ガイズ・アンド・ドールズ』や『エニシング・ゴーズ』におけるように、2人のヒロインが純情可憐対セクシーでコミックという明瞭な対照でなく、どちらもラテン系らしい気の強いお転婆娘で面白味が薄くなっている。

次にラモンが育ての父アレハンドロ総督に階級的抑圧と歪んだ愛情から父を「殺し」、暴力と権力により自己証明しようとするドラマが興味深い。プロローグでの暗示と後半父に愛して欲しかったという彼の台詞に表わされるだけで、ドラマ全体では未消化に終わっている。

神出鬼没のゾロはジプシーに習った魔法を使い、そのアクション・シーンは目を奪うし、ジプシーたちの情熱的なフラメンコと人気のジプシー・キングズの音楽が興奮を呼び、ロック・ミュージカルの魅力と迫力をもつ。ジプシー・キングズの既存ヒット曲「ジョビ・ジョバ」や「バンボレロ」などが印象的だが、このミュージカルのために作った新曲も多い。キングズの曲ルンバ・フラメンカはフラメンコより自由で大衆的であり、ミュージカルに合っている。

装置は主にカリフォルニア総督の殺風景な城だけといえるものの、美術的演劇的に巧みに工夫され、簡素だが見ごたえがある。また怪傑ゾロの影絵が舞台のみならず劇場の壁全体に大写しされた後のゾロのフライング登場や、煙のように消えるイリュージョンによる退場シーンもよい。舞台の深紅のカーテンには炎文字でZが燃え雰囲気を出している。ゾロを演じる坂本昌行は、アイドル・タレン

ト出身にしては巧い。声もよくとおり、背も高く、剣に巧みな英雄としてのみならずゲイ的なコミックな演技にも優れていた。

他のキャストも、通例の稽古以上に歌やダンスを練習したとのことで、島田歌穂も池田有希子も巧みにフラメンコを踊り、悪役ラモンの石井一孝は歌声の良さもあり存在感あり、ルイサの大塚ちひろも今回は成長をみせた。ラモンの父への愛憎を予兆させる子役の場面は面白い仕掛けで、幼いルイサ役の歌唱と演技も見事で、総じて観客を楽しませた舞台であった。

だが観客を興奮の渦に巻き込んだのは、舞台上でのギター演奏のアントニオ・カラスコによる歌と外人ダンサー達のフラメンコ・ダンスの好演・熱演である。日本人だけの再演で、はたしてこのラテン的熱気と魅力を再現できるであろうか。さらにこの終幕後の長く圧倒的迫力の踊りと演奏により本編のドラマがかすんでしまった。観客が当然魅了される仮装芝居があるのだから、今後、これを軸にしたドラマを練り上げ、より盛り上がる舞台にしてほしい。恐らく演出上の改善により克服できるであろう。これを超えた日本版再演を期待したい。(玉崎 記)

②④『ランメルモールのルチア』 4月13日(水) 10:00~14:30 MET ライブビューイング ミッドランドスクエア 本編のみ133分

昨年の『アルミーダ』と『夢遊病の女』両者の演出がメアリ・ジーマーマンで全く感心しなかったのだが、今回のジーマーマン演出は抽象的でもなく無理な読み替えでもなく、伝統的な演出だった。一幕の荒涼とした森、幽霊の出る荒れはてた泉の場面とスコットランドの雰囲気がでており、領主館の広間が一瞬の間に華やかな結婚式場になる舞台転換など想像力を喚起した。もっとも具体的であればあるほど、スコットの原作(1819作)は18世紀初頭の背景だったが、と違和感ももった。この舞台は衣装も時代設定もヴィクトリア朝(初演時の1835年)に移して、貴婦人はバesslerで膨らんだスカート、そして侍女のアリシャは家庭教師ジェーン・エアのようであった。ジーマーマンは原作より現代に近づけることで、当人の意志に反する結婚の悲劇が決して過去の遺物ではない(MET. Season program)と強調するのだが、実は18世紀の悲劇がこのドラマの核である。スコットランドの英国併合によりエドガー(オペラのエドガルド)の先祖代々の領地と城が新興貴族アシュトンに下げ渡されて、当主エドガーが貧乏に貶められた理不尽があり、さらにフランスへの使者エドガーはシュワート王家復興を願うスコットランド勢力に派遣されている。この王家と絡む歴史がルチアとエドガーの恋を翻弄している。

ジーマーマンは『ルチア』を幽霊に取憑かれた物語だと解釈する。泉の殺人、復讐の霊が殺された女性を通じてルチアに取り憑き、それがエドガルドを掴み、すべてを暗闇へ、悲惨な運命へと引き込んでいく(Mostly Classic35)。こう解釈したジーマーマンの演出は、当然泉の場面に幽霊の娘を登場させる。悲劇の予兆には良いが、幽霊や呪いを強調しすぎると悲劇が煽情主義のドラマになってしまう。

ナタリー・デセイの優れた解釈によってヒロインを造型したとジーマーマンが語っていたが、実際ヒロインは劇的であった。デセイの解釈は、兄に迫害され支配されるかわい少女のルチアが、狂乱の

場で恋を主張する強い女になるというものであった。兄の裏切りと恋人エドガルドの怒りに会い、彼女は女の主体性を表明する。それが花婿の殺害により恋人との恋を貫く行為になる（インタビューから）。それゆえ狂乱の場の長いアリアは、非常にドラマチックであった。白い花嫁衣装は殺人で破れ肌ははだけ、血しぶきで汚れ、狂気のゆえに動き回る彼女の動作も乱れ、アリアに叫びが入り、アリアは長いのに息もつがせぬ迫力で彼女の強い気持ちと恋が伝わってきた。狂乱してなお、恋人を求め、結婚式の参列の男達に、次々とエドガルドと思って歌いかける哀れさは感動させるものであった。

スピントのきいた強い声のジョセフ・カレーヤ（エドガルド役）は、小柄で可愛いデセイに比して、大柄で太く、老けて見え残念だった。その代わり最後の墓前で、天国のルチアへと歌う切々たるアリアが男性的で迫力があつた。だが甘く気品ある声であるべきルチアとの二重唱「溜息が風にとって」は感心しなかった。デセイがたっぷりした声でないで、不均衡であった。アシュトン役のルドヴィーク・テジェは素晴らしい悪役ぶりで、バリトンの声が堂々として魅力的だった。結婚式でのドラマチックな6重唱は、サザランド、クラウス、ボニング指揮のLDで感激した迫力とは比べものにならなかった。

各幕間に、ルネ・フレミングが舞台裏で演出家や歌手達の率直な意見を聞くインタヴューもライブビューイングの大きな魅力である。映画館では音響が良くないと批判されるが、難を超えてあまりある映像の迫力とドニゼッティの歌の美しさに感激した。（玉崎 記）

③『ルチア』 5月8日(日) 15:00~18:30 テアトロ・ジーリオ・ショウワ

川崎しんゆり芸術祭2011年公演として、2008年静岡オペラ国際コンクールで優勝し、第39回川崎市アゼリア輝賞を受賞した光岡暁恵をルチアとして迎え、また同じく第34回アゼリア賞を受賞した松下京介が指揮というこの公演は、実は3月の藤原歌劇団公演と岩田達宗演出以下同じスタッフであり、3月6日の主役2人が歌っている。

近年装置・舞台などにコストをかけることが難しいと岩田達宗が3月本公演で嘆いていたとのことだが、不況で経営が難しい今、藤原歌劇団は良い公演を続けているのに感心する。今回も簡素な舞台であった。悲劇・死を予感させる象徴的な装置で、階段を挟んで2つの鋭い剣を暗示する3角形の大道具だけの舞台を多様な色の照明と、装置の移動で変化させていく。衣装はMETと同様19世紀衣装という設定だが、18世紀よりは重々しい衣装が簡素な舞台に映えた。

今回の舞台は藤原歌劇団の底力を見せるものだった。光岡暁恵・小山陽二郎の主役二人以外は、本公演と異なり昭和音楽大学卒業生で藤原歌劇団の若手であるが、皆健闘していた。またいつもながらの藤原歌劇団合唱団の圧倒的な歌唱力と相まって、アンサンブルとして優れた公演をみせてくれた。ただし、1幕の迫力の6重唱「誰が怒りを抑えられよう」の魅力は十分感じられなかった。さて期待の光岡暁恵だが、比較的小さな劇場のせい、コロラトゥーラゆえの小さな声とは思えず、ソプラノ・レジーエロの声質がよく響き、恋する可憐な乙女という人物像が生きていた。暗い悲劇で装置も暗い舞台の中で、唯一光る明るイルチア（光の意味）の恋が、白いドレスに表わされ、美しい場面

になっていた。美しいコロラトゥーラに心するばかりに弱い声になることもなく、その点ではおそらく藤原歌劇団公演の5日の佐藤美枝子より良かったのではと思われた。それでいて、METのナタリー・デセイのドラマチックな演技とは異なり、狂乱の場面でも可憐な乙女が運命に引き裂かれる悲劇を感じさせる甘美な雰囲気と歌唱だった。純粋な乙女が、真っ白なドレスで一人階段に立ち、完璧な技巧のコラトゥーラで、20分の長いアリア（狂乱の場）を歌いきる。フルートと絡むアリアに、1幕の二重唱の名残が響くとその表現力に泣かせられた。何より光岡暁恵の歌唱だけで舞台が生きていた。「純愛を貫くために自らの意志を通して破滅する悲劇のヒロイン」（藤原歌劇団 Program）として演出されたようだが、十分にそれは反映されていた。

終幕の「神に向かって飛び立つお前」のエドガルドの印象的なアリアも忘れさせるほど、光岡暁恵が見事であった。この幕の前のアリアは、リリコ・スピントの声を要求するので、柔らかい声の小山陽二郎はあまり力を発揮できなかったようだ。

テアトロ・ジリオは小さいながら、オペラ上演のための馬蹄形の完璧なオペラ劇場である。ここでドニゼッティの名曲に浸る幸せを感じ、満足した公演であった。（玉崎 記）

⑨関西二期会 『La Rondine（つばめ）』初版 2011年5月28日(土) 16:00 アルカイクホール

作曲：G. プッチーニ 台本：G. アダージ 指揮：寺岡清孝、大阪交響楽団 演出：中村敬一 舞台美術：増田寿子 主催：関西二期会／財団法人 尼崎市総合文化センター

ヨハン・シュトラウス『こうもり』の前半にヴェルディ『椿姫』の後半を足したメロドラマ風のあら筋である。この作品はウィーンの宮廷劇場からの依頼で制作されたものであるためオペレッタ形式の台本であったが、プッチーニの要請でオペラに書き換えられた、とパンフレットの詳しい成立事情を読み納得した。関西二期会と（財）尼崎市総合文化センター主催のこのオペラ公演は、地元財界や音楽家以外の音楽関係者をも巻き込んで、文化の発信と活性化をめざしているようだ。パンフレットも充実した内容になっている。

マグダ役の平野は美しい声できれいに歌っているが、プリマの持っている圧倒的な存在感にはやや欠けるように思った。「ドレッタの美しい夢」が少しもの足りなかった。一方、ルッジェーロ役の根本は本職は大学薬学部勤務する工学博士だそうだが、立派な声である。ただ、所々音が嵌っていない様に聞こえた。リゼットは少しずるくて可愛い点がまたプルニエやランバルドもイメージに合っていた。演技者と演出家と双方の協働がうまくいっているのだろう。最後のマグダとルッジェーロの別れはもう少し感傷的であるほうが、メロドラマ的かもしれない。

1幕はカーテンとテーブルで パリのアパートマンの雰囲気を出していた。第2幕のプリエの舞踏場はパリの賑わいを出すためか、給仕達が派手な衣装に身を包んでいた。初めは違和感を感じたが、次第に感じなくなった。プロットの展開から考えても、2幕は4人の人生が大きく変わる場である。多少の驚きがあった方が良いのかもしれない。3幕は南フランスの海辺の避暑地の雰囲気が出ている。それほど装置にお金を使っているとは思われないが、工夫してあり良い舞台装置だった。

オーケストラについては、豊かな音楽を奏でていた。アルカイクホールでは関西二期会主催のオ

ペラと他の主権のオペラを年に数回上演している。多目的ホールのためオペラ上演には最適な設計でないように思われたが、関西音楽界の実力と活力を充分感じる事ができた。

(服部 記)

④びわ湖ホールオペラへの招待 オットー・ニコライ作曲 歌劇「ウィンザーの陽気な女房達」

2011年7月18日(月)

指揮：大勝秀也 演出：中村敬一 京都フィルハーモニー室内合奏団 出演：びわ湖ホール声楽アンサンブル

オットー・ニコライのこの作品はドイツ語によるジグシュピールで、同じ題材を扱っているヴェルディの作品よりもシェイクスピアの原作に忠実である。ファルスタッフ役が突出することなく市民たちが活躍するこの作品は、エリザベス朝イングランドのウィンザーでなく、19世紀ドイツの市民社会を描き出している。美しい旋律やアンサンブル部分も多いこの作品は、声楽アンサンブルのメンバーには相性の良い演目と思われる。大勝秀也の指揮は細部にまで神経が届いていて、オケ演奏が非常によい。中村敬一の演出は、音楽の良さを伝えることに神経を注いでおり、芝居としてもおもしろい。最後の森の場面は神秘的で自然豊かなドイツの森の情景を描き出し、若い恋人達の重唱や合唱も美しく楽しい。

ベテラン歌手達はさすがに演技も歌も上手でドイツ語の言葉もよく聞こえた。一方、若いメンバーも加わって、フレッシュではあったが、演技等にまだ未熟なところが残る。新人達にも激励と賞賛の意味を込めて、おそらく友人たちから多くの「ブラボー」が掛かっていた。しかし、既にプロになっているのだからやたらと「ブラボー」を掛けるのは、当の新人のためにも他の客のためにも控えた方が良さそうだ。また、このジグシュピールは歌中心のイタリアオペラとは性格が異なるオペラであるような気がした。

(服部 記)

④喜歌劇『こうもり』 7月17日 佐渡裕芸術監督2011 兵庫県立芸術文化センター

B組、佐々木典子・小森輝彦組の初日7月17日を鑑賞。

華やかで、あっと驚く舞台装置と19世紀末の衣装、きらきらと輝く照明、レビューなど、関西のショウビジネスに圧倒され、客席のノリの良さを大いに楽しんだ。ベルリンフィルを今春に振ったばかりの指揮者佐渡裕は、郷土の英雄であるのだろう。非常に人気がある。若手演奏家で構成された兵庫県立芸術文化センター管弦楽団は、ウィーンから6人のゲストプレイヤーを招いて補強されていた。日本の楽団の奏でる音楽としてはウィーン情緒を紡ぎ出して上出来であるが、全体では少し緻密さに欠けるように感じた。

今回の日本語上演で何よりもすばらしかったのは歌唱であり、演技である。特に、ロザリンデ役の佐々木とアイゼンシュタイン役の小森は、ヨーロッパの舞台に立っていたからか、日本語でも何とも言えないウィーン音楽のリズムが感じられた。歌がすばらしく上手で、演技もわざとらしさがなく、ロザリンデが仮面を被って夫をだます場面などは客席から押し殺した笑いが聞こえてきた。日本人歌

手のなかでこの2人は別格である。また、アデーレ役の小林は美しい声で演技も上手く、若干高音部が少し締まるように聞こえたが、注目株の若手であるのは間違いない。

オルロフスキー公爵の役は日本では女性アルト歌手が歌うズボン役であることが多いが、この役をヨーロッパで長年歌ってきた男性アルト歌手コヴァルスキーが演じた。彼はこの公演を最後にオルロフスキー役を引退するという。ズボン役であれば宝塚風のかっこいい公爵となるのだろうが、コントラルトの声はかえって怪しげで退廃的な公爵像を作りだし、「かけつけ3杯」と夜会の招待客に酒を勧める姿は、妙なりアリティがあった。巨大なシャンパングラスが林立する夜会の場面から、刑務所の場面に装置が変わっても、公爵は舞台の端でのぞき見していた。元来アイゼンシュタインだましは、彼の友人ファルケ博士が仕組んだ劇「こうもりの復讐」であるが、この公演では、人生に退屈したオルロフスキーが屋敷内に刑務所まで作って一芝居を打たせたという設定であったからである。

落語家の桂ざこばが看守フロッシュ役を務め、時事問題に言及した語りで場内を大いに沸かせた。またオーケストラピット手前に宝塚風の舞台（銀橋）が設置され、そこで開演前と幕間に仮面を付けたダンサーが寸劇で観客を楽しませていた。観客サービスがあちこちにあり、またノリの良い関西の観客はそれによく応じていた。上演前や幕間に多くの人がハワイエでシャンパンを飲んでいたが、本当に飲みたい気分させる音楽で、「全てシャンパンの泡のせい」という台詞に納得してしまうほどだった。しかも、楽しいだけおもしろいだけで終わらず、多少の暗さと上品さで人生の諦観を見せたところがすばらしい。世紀末ウィーンの雰囲気が出ていた。

フィナーレは、まさに宝塚の舞台を連想させると派手な舞台装置で「ウィーン我が夢の街」など歌のショウが展開した。筆者は、舞台上に佐々木典子がいないのを見て、オペラ歌手の彼女はこのフィナーレに出るのを嫌がったのかと思った。が、その次の瞬間、彼女は天井から吊り下げられてにこにこ登場した。客席までもがシャンパンに酔って、大きく揺れているような錯覚にとらわれた。満足のいく公演であった。

（服部 記）

⑤3 子供のためのシェイクスピアカンパニー『冬物語』（山崎清介 脚本・演出） 8月27日(土) 愛知県芸術劇場小ホール

「2010年度紀伊国屋演劇賞団体受賞記念公演」と銘打たれた今年度公演は、シェイクスピア後期のロマンス劇『冬物語』である。「冬物語」とはヨーロッパの長い冬の夜、炉端で語られるおとぎ話の謂いで、シェイクスピアは開幕早々王子マミリアスに「冬には悲しいお話が一番いいね。」と語らせている。ボヘミアとシチリアを舞台にした16年の時の隔たりの中に、嫉妬による家族の崩壊と和解、捨て子物語、身分違いの若者の恋と結婚の成就などを盛り込んだ話が、あくまでも虚構として観客に提示されていた。脚本・演出を担当する山崎はシェイクスピアの台本を再構成して、簡潔にまとめているが、前述の王子の台詞を残している。すでにおなじみとなった木の机と椅子を並べただけの簡素な装置と黒マント集団の拍子とタンギングによる場面転換やマントの脱衣が役を演じる契機となるなどの様式は、荒唐無稽なお話と舞台設定に特に効果的であると思われた。

悲劇は、シチリア王が妻ハーマイオニーと親友ボヘミア王との密通を疑うことから始まる。息子の

突然の死、友と信頼する家臣の逃走、誕生したばかりの娘の追放と妻の死など愛するものを次々と失い神託を仰ぐ前半は緊迫した台詞劇である。老臣アンティゴナスが追放された王女とともに嵐の海を渡りボヘミアの海岸にたどり着いたとき、その緊張は緩み始める。道化役の戸谷が老臣と、赤ん坊を拾って育てる羊飼いとを早変わりして演じた。アンティゴナスが巨大な熊に襲われるシーンが、手に可愛らしい熊手を持った黒マント集団とそのシルエット、雷鳴でユーモラスに表された。パフォーマンスは、リアリズムでは表しきれない自然の絶対的な力と真実を語りだす虚構の力とを、同時に示すことに成功していた。

山崎の操る人形が神話的世界の語り部として、16年の歳月を飛び越える役を果たした。ボヘミアの牧歌世界では、王子の行動を見張るためとしながらも、王もまた変装して春祭りに参加する。佐藤誓が、シチリア王役とはうって変わって台詞回しも軽やかでいかわしい行商人を演じた。しかし、春祭りの盛り上がりをいささか欠いたのは、行商人の山車が過ぎ去りし昭和の夏の金魚売りを連想させたからかもしれない。

9人の俳優で演じられるこの芝居で、何役もこなす俳優の演技を観るのも楽しみであった。そして最大の見せ場は、巨匠の技によって死んだ妻そっくりに作られた像、実は生きていたハーマイオニーが動き出して和解に至る場であった。「以前よりも皺が増えた」という台詞に観客は沸く。芝居巧者の伊沢磨紀がこの場を取り仕切るポーリーナとボヘミア王を早変わりして演じ、成り行きを見守る宮廷人と観客双方の期待を操り、最後にホロりとさせた。「匠の技は、自然を凌駕する」という台詞はこの芝居全体にもあてはまったのである。そして「真実は時の娘」というルネサンス期のモットーがこの上演では、愛情や信頼、親子の絆という言葉に入れ替わって息づいていると感じた。

昨年までの上演で多く観られた、時事問題への言及やギャグが今年には皆無であったことも指摘しておきたい。3月の震災以来、舞台外の悲惨な現実が舞台上の現実を遙かに上回っていたからであるように思われる。

(服部 記)

⑥2011年夏ロンドン (&ストラットフォード・アポン・エイボン) 演劇事情

2011年夏、3週間ほどのイギリス滞在中にロンドンとシェイクスピア生誕の地ストラットフォード・アポン・エイボンで12公演を観てきた。わずかこれだけの公演から、ロンドンのこの夏の演劇事情全般を描けるとは思わないが、いくらかの状況はつかめると思う。

情報獲得手段が実に多様になったこの時代に、新聞の紙面から演劇情報を得ようとする人は大幅に減少しているであろうから、最近では、新聞の演劇案内は簡素になり、掲載の公演数も減っているように見える。たとえば、ザ・タイムズの演劇案内欄には、ナショナル・シアターは掲載されていない、またシェイクスピア・グローブ座も劇場名は掲載されているものの、公演名は言及されていない。劇場に足を運ぶ人はおそらく別の方法で演劇情報を入手していると思われる。それでもザ・タイムズの紙面から、ロンドン演劇界の現況をはかり知ることはできる。ロンドン滞在中のザ・タイムズによると、ロンドンでの34の公演中、半数を超える19公演がミュージカルである。この傾向はここ10年以上続いている。演劇界がミュージカルに席卷されている。今回観劇した12公演中、ミュージカルは

1公演、残り11公演がシェイクスピアをはじめとするいわゆる「劇作品」だったので、後者を中心に話を進める。

今夏、チケット入手が最も困難だった公演は、3年間継続されたがこの夏で終わることになった演出家サム・メンデス主宰によるブリッジ・プロジェクトの最終作品シェイクスピアの『リチャード3世』であった。主演はケヴィン・スペイシー。メンデスとスペイシーのコンビは映画『アメリカン・ビューティー』以来のことである。このプロジェクトには、イーサン・ホークの『ハムレット』をはじめとして、話題になった公演が多く、今回の『リチャード3世』も多いに期待していたが、どうしてもチケットが手に入らず、残念ながら、観ることができなかった。

『リチャード3世』に次いで、チケットの入手が難しかったのは、デイヴィッド・テナントがベネディクトを演じたシェイクスピアの『空騒ぎ』であった。前売り券はすべて売り切れていたが、こちらは、朝早くから劇場の前に並んで、運よくチケットを手にすることができた。テナントはイギリスの人気テレビ番組『ドクター・フー』で主役に抜擢され、国民的人気俳優になったが、2008年にロイヤル・シェイクスピア劇団でハムレットを演じ、非常に高い評価を得た。筆者もこの公演を観たが、これまで観た数多くのハムレットのうちでも、1,2を争うほどの素晴らしいハムレットであった。そのテナントがベネディクトを演じるということで、大いに期待したが、その期待は裏切られなかった。テナントは、同じ『ドクター・フー』で共演したキャサリン・テイト演じるベアトリスを相手に、ハムレットを演じた時とは全く異なった、軽快な演技をみせ、役者としての幅の広さを示した。演出のジョージ・ロークは、1980年代のジブラルタルに舞台を移し、視覚を重視した演出をとったが、演出によって、シェイクスピアの喜劇が現代に実に面白くよみがえりうる瞬間に立ち会ったような気がした。

もう1作品、人気が高かったのは、児童文学者マイケル・モーバーゴの1982年の小説をニック・スタフォードが脚色した『戦火の馬』である。この作品は2007年10月にナショナル・シアターで初演され、翌08年の2月まで上演された。さらに9月から9年3月まで再演され、その後、劇場をニュー・ロンドン・シアターに移して、続演されていた。2011年に入ると100万人目の観客動員を達成した。物語は簡単だ。主人公の少年アルバートは父親に馬を買ってもらい、ジョーイと名付けてかわいがっていた。そのジョーイが「軍馬」として軍に徴用され、第一次世界大戦の戦場ヨーロッパ大陸へと送りだされてしまう。ジョーイを失って嘆き悲しむアルバートは、年齢を偽って軍に入隊し、ヨーロッパ大陸に渡って、負傷しながらも、最後、ジョーイと再会を果たす。この劇の注目すべき点は「戦火の馬」ジョーイである。原作ではジョーイが物語を語るが、劇ではジョーイはその動きだけですべての感情を表現する。馬そのものは全体を木枠で、頭部や胴体の一部は布で表現される。馬は基本的に3人（複雑な動きをするときは5人）の人形使いによって実に見事に操られる。操るのは南アフリカの人形劇団、ハンドスプリング・パペット・カンパニーである。彼らの操る馬の動きを見ているだけでも感動する。初演された2007年にはイーヴニング・スタンダード賞のベストデザイン賞をはじめとして、デザインや振付の部門で高く評価された。2010年にはニューヨークでも公開され、トニー賞の最優秀作品をはじめとして5部門で受賞し、さらにハンドスプリング・パペット・カンパ

ニーにはトニー賞特別賞があたえられた。ただ、2010年にローレンス・オリヴィエ・オーディエンス賞のモウスト・ポピュラー・ショーを与えられたことから分かるように、この作品を「劇」としてよりも「ショー」として扱う傾向がある。この公演の宣伝パンフレットでもこの作品を自ら「ショー」と呼んでいる。この作品に感動したスティーヴン・スピルバーグは早速映画化に取り掛かり、アメリカでは2011年12月に、日本でも2012年3月に公開予定である。

ナショナル・シアターでは、チェーホフの『桜の園』とトマス・ヘイウッドの『やさしきで殺された女』を観た。『桜の園』は演出がハワード・デイヴィス、ラネフスカヤ夫人をゾエ・ワナメーカーが演じた。この二人は、昨年、アーサー・ミラーの『みんなわが子』で、一緒に仕事をした。この時のワナメーカーの母親役は大変素晴らしいものであったが、今夏のラネフスカヤも、それに劣らぬ出来で、彼女が舞台上で登場すると、舞台全体が引き締まる感じがした。ただ、セットが貧弱で、旧家の邸宅の雰囲気こそぐわぬ気がした。一方、『やさしきで殺された女』では、演出のケイティ・ミッチェルは舞台のセットに見事な工夫を施した。この作品は1603年に作られたが、近年はあまり上演されない。筆者が見たのはもう30年近く前、ロンドンのバービカンの小劇場ザ・ピットでのロイヤル・シェイクスピア劇団による公演であった。おそらくそれ以降今回の公演まで一度も上演されていない。作品はこの時代によく見られたようにダブルプロットで構成されている。貴族の娘アンはジョン・フランクフォードと幸せな結婚生活を送っているが、夫の友人ウエンドルと関係を持つ。それを知ったジョンは妻が生活に困らないよう算段したうえで、田舎の小屋に閉じ込める。アンは食事をとらず衰弱して死ぬ。一方、サー・チャールズはアンと争いを起こし、人を殺して捕えられる。サー・チャールズの妹スーザンは兄の保釈を求めて、財産を処分せざるを得なくなる。サー・フランシスはスーザンの弱みにつけ込んで彼女を凌辱しようとするが、彼女の清廉さに心打たれ正式に結婚する。演出のミッチェルは舞台を二分して、上手にジョンとアンと屋敷、下手にチャールズとスーザンの屋敷を配した。2つのプロットをそれぞれの舞台上、時には同時に演じて、2つのプロットの対比を見事に描いて見せた。ダブルプロットを舞台の上で同時進行的に演じてみせるというこれまでにない見事な演出といえよう。休憩なしの2時間の上演がアツという間に過ぎた。

シェイクスピア・グローブ座では、3作品を観たが、なかでも興味深かったのはハワード・ブレントンの『アン・プリン』であった。この作品は今年の夏にもこの劇場で上演されたが、好評だったので、今夏も続演された。ヘンリー8世の2番目の妻アン・プリンは、宗教改革家ティンダルと接触して、ヘンリー8世をカトリックへと再度改宗させようとするという荒唐無稽な内容だが、アンを演じたミランダ・レイソンの熱演もあって昨年同様、高い評価を得ていた。『ドクター・フォースタス』でも『ザ・グローブ・ミステリーズ』でも感じたのだが、劇場開場当時と比べると、役者の演技のレベルは相当高くなったと思う。そしてこの劇場の持つ祝祭的空間はいまだ健在である。

ストラットフォード・アポン・エイボンでは3つの作品を観た。メイン・シアターは2年前に取り壊され、この春、装いを全く新たに姿をあらわした。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーは劇場の改築にあたって、資金の一部を個人・団体・企業から募った。資金を提供した場合、劇場内の座席に提供者の名前を記載するというのだ。これを「ネーム・ア・シート」という。驚いたことに新

劇場のほとんどの座席に名前がついていた。筆者も資金提供に応じて、座席に名前を残してもらった。今回はその座席に座って観劇することができた。新劇場は、現在使われているもう一つの劇場、ザ・スウォンと同じ構造で、三方から客席が舞台を囲っている。シェイクスピアの時代の劇場構造に少しでも近づけようとの意図からであろう。この新しい劇場でマイケル・ボイド演出の『マクベス』を観た。開幕劈頭に登場するはずの3人の魔女は登場しなかったり、3人の魔女を子供が演じたり、この劇にとって大切なせりふが省略されていたり、マイケル・ボイドの演出意図が観客に伝わらず、違和感だけが残った。新しい劇場の構造では、これまでのように舞台装置によって演出の意図を表せなくなったからであろうか、ボイドはシェイクスピアのテキストそのものに手を入れ始めた。この劇場の構造がどのように効果的に使われていくのか注視していきたい。(酒井 記)

⑬ミュージカル『ロミオとジュリエット』（小池修一郎 潤色・演出）10月8日(土) 梅田芸術劇場メインホール

作：ジェラルド・プレズギルヴィック 振付：TETSUHARU（増田）哲治

2001年フランスで制作され、その後世界20数カ国で大ヒットした作品である。日本では、宝塚歌劇団が小池修一郎演出で2010年初上演した。今回は日本オリジナルバージョンだという。主要な役はダブルキャストであったが、城田優、フランク茉奈組を観劇。

悲劇の舞台ヴェローナは過去と未来が交差する空間として造型され、市街再開発の工事現場と廃墟の遺跡を合わせたような舞台セットで、『ロミオとジュリエット』を翻案したミュージカル『ウェストサイドストーリー』を連想させた。名門家族の対立が赤と黒の衣装で表象され、群舞でもそれぞれの位置関係が瞭然としていたが、ヒョウ柄の衣装では町の暴走族の抗争の様に見えてしまった。また、ジュリエットはキャピレット夫人とティボルトの間に生まれた不義の子という設定で、今回のバージョンのオリジナルである。宝塚版の設定では、ティボルトはジュリエットに対して近親故の許されぬ恋の想いを抱いていた。両家の対立だけでは、ティボルトのロミオに対する憎しみの理由を観客に説得できないと考えたのであろうか。毒々しいまでのキャピレット夫人との不倫関係は、今回の舞台では可能でも、「清く美しい」宝塚の舞台では難しいだろう。

「ロミ&ジュリ」観劇体験の醍醐味は、若者の理不尽な恋が行き違いから破滅へとまっすぐ突き進んでいく行動を、既に結末を知っている観客たちが上から目線で見守るところにある。今回の上演では、性急すぎる結婚とその死という原作のストーリーを、町の再開発と名家の没落、家族の亀裂、不倫、若者たちの暴走、携帯電話によるコミュニケーションなど現代の意匠を用いて、説明的に書き直している。ジュリエットの仮死がロミオに伝わらなかった原因も、原作におけるペストによる町の閉鎖から、携帯電話の不通に変えられ、卑近で個人的なことが2人の愛を阻止していた。2人は運命に翻弄された、‘star crossed lovers’として描かれていない。悲劇ではなく悲劇の素材を扱ったミュージカルショウだと思った。

ダンサーによる「死」のダンスは愛と精神性の深さを補う工夫であるように思われた。幕開きから終幕まで、黒い衣装を着て恋人達にまわりついて無言で踊るその構図は、美しい若い娘と死神を描

いた「死の舞踏」の絵を連想させる。表現力のあるダンスであるが観ていて気持ちよいものではなく、あまり感心できない。宝塚版では、ダンサーは「愛」と「死」の2人でバランスがとれ、違和感をあまり感じなかった。

出演者のなかで、特にジュリエットの乳母役の未来優希が歌も演技もうまく、場を盛り上げていてすばらしかった。また、ベンヴォーリオ役の浦井健治、ロレンス神父役の安崎求など脇役に歌のうまい俳優が配してあったが、ミュージカルを楽しむためには、主役にもう少し歌唱力のある俳優を持ってきてほしかった。また、テーマ曲の「エメ」は宝塚では終演後も耳に残ったが、この上演では印象が薄かった。「愛」よりも「死」が強調されていたためだろうか。(服部 記)

⑦『スザンナの秘密』 10月19日(水) 宗次ホール

2011年9月軽井沢の大賀ホールで上演されたヴォルフ＝フェラーリ作曲のオペラブッフアの小品が名古屋宗次ホール、ランチタイムコンサートで再演された。思わせぶりのタイトルに反してたわいもない筋、新婚夫婦の日常のちょっとした行き違いが、美しい旋律で展開される洒落な作品である。夫婦2人の登場人物と黙り役などは『奥様女中』に似ている。日本語訳・演出は夫のジルを演じたバリトン歌手古澤利人による。

上演に先立って、古澤利人の軽妙なトークがあった。そのなかで、原語上演・字幕の代わりに日本語上演にした理由が説明された。字幕にすると、喜劇のオチが演技に先立ってわかってしまうからだという。演技が笑いのツボに嵌ることを願っての日本語は、訳とは思えぬほどこなれていて、しかも旋律に寄り添っている。ホールの小空間にマッチしたシンプルな道具立てであるが、3人ともなかなかの芸達者で、客席からはクスクス笑いが聞こえていた。小道具の写真立てには、人気タレントの顔写真が母の写真として収まり、それも笑いを誘っていた。ブッフアにふさわしく時事的な話題を取り入れたり、ホールの舞台とバルコニー舞台の高低差をうまく利用して、町中でのすれ違いを表したり、ホワイエの椅子が調度品として並べられていたりして、非常に工夫が凝らしてあった。ただピアノの音が大きすぎて日本語が聞き取れない箇所があったのは残念であった。響きのよいホールであるのでバランスに気をつけてピアノの蓋を閉めてほしかったが、それを差し引いても楽しく珍しい演目である。日常の喧噪からしばしの休息ができるこのようなお洒落なオペラ上演が名古屋でもう少し増えることを望む。古澤利人は背が高く知的で、今後多方面に渡る活躍が期待できそうだ。

(服部 記)

⑧愛知県芸術大学大学院オペラ『こうもり』 12月4日 長久手文化の家

12月4日に長久手文化の家で愛知県芸術大学院オペラ『こうもり』を観た。彫刻専攻の学生の作品が舞台装置として使われ、シュールな感覚であった。特に、刑務所の場面で天井からつり下げられた白い手首の一群は、表現主義のポール・デルボーの世界を連想させ素敵な空間となっていたが、ドラマの内容との関連は不明であった。演出は演技やダンス、歌、演奏など細部にまで行き届き、院生・学生たちががんばっていたように思う。大いに笑ったが、いささかウィーンの音楽に特有の陰影

と上品さに欠け、最後の「シャンパンの泡のせい」は単なる台詞として聞こえただけであった。一生懸命すぎたのか、経験不足なのか、おそらくその両方と思われるが、彼らの今後に期待したい。

(服部 記)